



地域住民が自然に集る拠点となる

大沢野町ボランティアセンター
〔富山県／大沢野町社会福祉協議会〕

<http://www.town.osawano.toyama.jp/welfare/>

温泉を中心に地域住民が自然に集る拠点づくり

大沢野町社協は、豊かな自然に囲まれた町健康福祉センターのなかに事務所をおいている。健康福祉センターは、地域福祉・在宅福祉・老人福祉のセンター機能を持ち、温泉を引き込んだ浴場には毎日200人もの高齢者が集う。

社協では子育てサロンやちびっこサポートセンター、高齢者対象のデイサービスや生きがい事業、リハビリテーション事業など多彩な事業を実施しており、そうした事業に参加する親子、高齢者、障害のある方や、温泉に入りに来る高齢者など、地域住民が自然に集まる拠点となっており、来所者同士でゆるやかな交流が行われている。

地域住民の窓口としての役割

社協の多彩な事業展開にはボランティアとして地域住民の参加が不可欠であり、そのコーディネート業務や、それぞれの事業の中での相談業務等にボランティアコーディネーターが携わっており、Vセンターは、地域住民の窓口的な役割を果たしている。

社協事務所の玄関が浴場の受付となっており、入浴



や事業に来所する住民とは自然と顔なじみの関係になる。窓口で「ちょっと話がある」と言われれば、事務所に入ってもらい、相談になることもよくある。

児童虐待防止を目的に地域の協働を進める

Vセンターでは、従来より子育て支援事業に精力的に関わってきた。平成9年から子育てサロン「ちびっこあ〜つまれ」を月一回開催したことに始まり、現在はセンターで週1回、地域3箇所ですべて週1回開催するに至っている。平成13年には、地域住民を会員として幼児の一時預かり等を行う「ちびっこサポートセンター」事業を開始した。

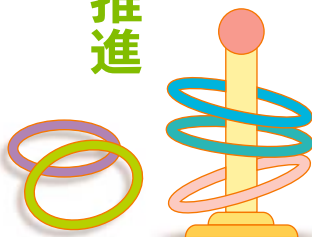
こうした事業を展開する中で、児童虐待の防止について関係者の間で関心が高まり、平成14年度から児童虐待防止事業に取り組むこととなった。民生委員児童委員協議会、保育所、小学校、児童相談所、教育・保健等の関係者で構成する児童虐待防止連絡会を結成し、その事務局を社協のVセンターが引き受けることとなった。

連絡会では全体会の他、担当者によるケース検討会、児童虐待に関する研修会や講演会を実施するとともに、街頭キャンペーンなどを展開した。Vセンターが連絡会の窓口となったことにより、関係者だけでなく地域住民との連携協働を進めることができ、今後も引き続き実施していく予定である。

特集

これからのボランティア！ 市民活動センター像 を考える

「第2次ボランティア・市民活動推進5カ年プラン」進行中



全社協では平成13年8月に「第2次ボランティア・市民活動推進5カ年プラン」(以下「5カ年プラン」)を策定し、ボランティア・市民活動に関わる多様な関係者と社協関係者に向けて発信しました。5カ年プランは、ボランティア・市民活動の推進にあたって、社会的に共有すべき課題や取り組みの方向性について整理し、課題の解決に向けた具体的なプログラムを提示しています。本号では、5カ年の中間年にあたる今年、ボランティア・市民活動センターのめざす方向性を、二つの事例を通して考えていきます。

市民の力を引き出すセンターをめざす

市民活動センターたちかわ
〔東京都／立川市社会福祉協議会〕

<http://act.annex-tachikawa.com/>



市民に必要とされるセンター像を1年間かけて議論

「立川ボランティアセンター」は相談や情報が多様化する中、市民にとって使い勝手のよいセンター像を探る必要性を確認し、平成14年度に「ボランティアセンターのあり方検討委員会」を設置した。「5カ年プラン」の内容を受け、委員会における一年間の議論を経て、「<多様な価値観のもとに><多様な分野><多様な形態で>自立した市民が双方向につながることが人と町をさらに豊かにしていく。そのためには、価値観・分野・形態で分断せずに包括的な視点で人や活動をつなぐ中間支援組織＝市民活動センターが必要」という結論に至り、平成15年度から名称を「市民活動センターたちかわ」(以下「センター」とし、機能を拡大して運営している。

お客様は地域に暮らす全ての市民

センターの顧客は活動者だけでなく、子どもから高齢者、障害のある人もない人も含めた、地域に暮らす全ての市民と考えている。よって、誰もが市民活動を通してまちづくりに参画する土壌づくりは、Vセンターの大切な役割である。センターの運営自体も市民が主体となるよう工夫し、センターの運営委員を市民から公募したり、助成事業を市民参画の審査会方式に改めた。

センターでは、市民活動団体向けのマネジメント事業や市民学習プログラムの実施と支援、イベント開催、情報提供など多彩な事業を展開

している。そこでのセンター機能の基本的な考え方としては、職員が全ての分野の専門家となる必要はなく、市民の力を引き出すという専門性を発揮すればよい、というのがスタンスである。また、センターは地域の新しいニーズを掘り起こす役割もあり、センターが窓口となって捉えた多様な課題を、社協のそれぞれのセクションが事業に反映させている。センターと社協全体が互いに活性化しあい、地域の生活課題に幅広く対応できる体制づくりに努めている。

市民会議の運営を通して、行政と市民の協働の方向性を探る

立川市が行政計画のマスタープランである第二次基本計画の策定を市民参画で作成するに当たり、センターが市民会議の進行と提言のとりまとめを担うこととなった。市民会議の運営を通して、これまでいかに限られた人たちのかかわりとなっていたかを実感させられた。それほど多様な市民がそれぞれの価値観のもとに意見を述べるのを、議論のルールにのせ、合意形成を行い、提言をつくり上げていく、という過程をこれから実践していくことになる。行政と

市民がいかに協働できるかという試行であり、存在意義が問われる大切な事業であるとセンターとして考えている。



Vコーディネーターが中心に取り組んだ子育て支援

大沢野町ボランティアセンター
ボランティアコーディネーター 江本知子さん

大沢野町は隣接する富山市のベッドタウン化しているの、若い世代の核家族が増えています。子どものことで相談が多くなってきたので、Vコーディネーターが中心になって子育て支援に取り組みました。

児童虐待の問題にVセンターが事務局として取り組むという例は余りないかもしれませんが、子育て支援事業に長く関わってきたため、違和感なく受け止めています。町ではまだ虐待が顕在化してはいませんが、社会問題として関心が高く、予防ということが一番大事と認識しています。

また、社協の事業には多くのボランティアの方に入ってくださいますから、Vコーディネーターもいろいろなところに関わるようになります。専門相談は別にありますが、簡単な相談はVコーディネーターが受けています。

社協は福祉をするところと知られていますが、Vセンターはまだまだ認知度が低いんですね。一般の人にはVセンターは何をやるところなのかはまだわかってもらっていないので、認知度をあげることを課題のひとつと考えています。

私たちの基本理念は、「誰もがいきいきと安心して住み続けられる福祉の町づくり」です。子どもからお年寄りまで、また、障害を持った方も、みんなが、自然に集まってきて交流ができるような町を目指しています。



センターや社協の使命をみんなで共有し機能拡大の不安を解消しました

市民活動センターたちかわ
ボランティアコーディネーター 枝村珠衣さん

なんだかんだいっても「福祉」分野を得意としていたセンターの機能を拡大することに対して、職員の間で不安がありました。その不安を解消し、必要とされるセンター像を共通認識とするために、住民一人ひとりの「個」に立ち戻って考えるという作業を行いました。例えば、ケアを受けている高齢者が何らかの市民活動に関わることで活力を得、自己実現を果たそうとしていることに気づいたりします。人の日々の暮らしは多面的であり、支援が必要な人も、別の場面では支援する人になれるわけですから、「人が豊かにくらしていくこと」を大切に、市民の力を引き出していきたく話し合いました。

また、社協の中でセクションを越えた横断的なプロジェクトを設置して協議する中で、「立川というまちで何を大事にしていくのか」「社協として何にこだわっていくのか」という議論を深めていきました。新たな相談や疑問に思ったことを、職員の間で日常的に議論する習慣があったことも、センターや社協の使命を職員の間で共有するのに役立ちました。そうやって少しずつ不安を解消していったのです。

市民活動センター化したことの効果としては、これまでつながりなかったところから「一緒にやろうよ」と声をかけられるようになったことです。商工会のイベントやマラソン大会といったスポーツ系のイベントでも、市民参加のブースを提供していただくなど市民同士の出会いの場面が広がりましたし、団体運営の実務についての相談も来るようになりました。視点が違う人が集ると、アイデアがぶわっと広がって楽しいし、面白みがあります。

◎ともに悩んで信頼される ボランティア・市民活動センターになろう◎

山崎美貴子氏(全国V活動振興センター運営委員会副委員長/神奈川県立保健福祉大学保健福祉学部長)から、5ヵ年プランを通してめざすべきボランティア・市民活動センターの姿について伺い、そのポイントをまとめました。これからのセンターのあり方を考える参考としてください。



に集め、相談にも乗る。

- 多様な情報を提供する。インターネットなどを活用して、V・市民活動センターに来られない市民も視野に入れて情報提供の方法を考える。
- 昼間に時間がとりにくい学生や勤労者も利用できるよう、センターの開館時間帯を考える、など。

また、分野も福祉に限らず、多様な分野の活動をしている人たち同士が出会える場づくりも重要である。「分野が違う」「考え方が違う」と区別しないで、誰もが関心を持てるような領域をつくれれば、今までは出会えなかった人たちが出会えるようになる。その出会いが協働活動につながり、新しいアイデアや活動が生まれてくる。

◎「地域の人々の暮らしをトータルに支えること」を視点にもつ

市民の暮らしは多様化しており、その中には外国籍の人、家庭に閉じこもっている人、ホームレスの人、社会的に孤立状態にある人もいる。どのような状況にあっても誰も地域社会から排除されることなく、ともに生きることを視点に、高齢者や児童、障害者といった分野別の福祉の枠やレッテルをはずして活動していくことがV・市民活動の役割である。

従ってV・市民活動センターは、「福祉」を狭く考えず、人と人が支えあい、学びあい、人と人の関係をつくっていくことを「福祉」として捉え、「地域にすむ全ての人々の暮らしをともに支えあう」役割とすることが求められている。その「福祉」を支えることが、地域と私たちの暮らしを豊かにしていくことにつながっていく。

◎ボランティア・市民活動センターの入り口を狭めない

「地域の人々の暮らしを支えあう」多様な市民による活動を支援していくのが、V・市民活動センターの役割であるならば、「福祉分野の活動ではないから受け付けません」という対応をすることは、V・市民活動センターとして最初からシャッターを下ろしてしまうことになり、地域のニーズが見えなくなってしまう。

V・市民活動センターに寄せられる相談の中には、まったく違う分野だったり、経験がなかったりして答えに困るものもあるかもしれない。しかし、そこで拒否したり、わからないからとお断りするのではなく、そういう相談にこそ、ニーズが隠れていることもあり、そこからプログラム開発や課題に対応するためのマネージメントの必要性が見えてくるものが少なくない。

「みんなとともに生きる」ということは、支えあう活動のしくみづくりにつながるのではないだろうか。

◎多様な市民が出会う場をつくる

誰もが地域社会から排除されず区別されないために、V・市民活動センターも、可能な限り誰もが利用しやすく、使いやすい窓口となることが求められている。

例えば、

- 個人や小さなグループも活動しやすいように、センターを活動拠点として会議室やメールボックス、印刷機、折り機、パソコンなどが利用できるようにする。場合によっては情報を一緒

◎ボランティアコーディネーターの役割の基本は、「つなげる、支える、学びあう」

Vコーディネーターの役割は、支援を必要とする人と支援する人、支援する人同士をつなげ、つながっている輪を支えとともに、多様な活動や考え方もつなぐ人々がお互いを学びあう環境づくりを進めること。「つなげる」前には、地域をよく見つめてニーズを掘り起こす、ニーズに気づくという、気づきと発見がきちんとできていることが前提となる。また、学びあいの後には「協働する」につながっていくことがこれから求められる。

◎信頼されるボランティア・市民活動センターをめざそう

大切なのは一緒に悩んで考えること。その過程でノウハウが蓄積され、忍耐と熟達が進むのが次の展開への希望をつくっていく。相談されて困った時に、「センターとは関係ない」とするのか、受け止めてつないでいくのか、ここに大きな違いが生まれてくる。

「V・市民活動センターに行けば」、相談に乗ってもらえる、助成金の情報が得られる、他の活動者と連絡がつく…そう市民が思ってくれればうれしいことである。「あそこに行けば」という信用を得られることが、V・市民活動センターにとって最も大切な財産なのである。人々の信頼と信頼をつないでいく活動を積み上げていく過程で、信頼されるセンターになっていくのではないだろうか。

5ヵ年プランをお読みにになりたい方は…

「第2次 ボランティア・市民活動推進5ヵ年プラン」と「社協ボランティア・市民活動センター強化・発展の指針」

ボランティア・市民活動を始めた地域福祉活動全体を推進する視点と、これからの社協発展のためのプログラムを提案。地域福祉、ボランティア・市民活動担当者の方にぜひ一読いただきたい内容です。

発行：全社協・全国ボランティア活動振興センター
TEL 03-3581-4656
規格：A4判 63頁
頒布価格：250円（消費税等込、送料別）

